

おはようございます。(拍手)

ご紹介いただきました四日市市の井上哲夫でございます。きょうはIBMの環境シンポジウム第3回が私どもの四日市市で開催されてまことにありがとうございます。このようなシンポジウムを私どもの市で開催していただくことに関しまして、IBMの皆様から感謝を申し上げます。

私どもの四日市市は環境に非常に熱心であると言われますが、実は環境に敏感であるという都市でございます。それは皆さんもご存じのとおり30年前に四日市公害判決が出されまして、非常に日本の環境政策を大きく変えた、そういう判決が出たまちであるからです。

実は私、きのう中国から帰ってまいりました。天津市で都市の発展フォーラムというのが開催されて、天津市と四日市市は友好都市である関係から、どうしても向こうで、アジア地域の首脳が集まりました席で、都市の発展と環境政策ということで四日市の主張と申しますか、経験を話してくれということで行ってまいりました。帰ってきてすぐにこうしてIBM主催の環境シンポジウムで皆様方にごあいさつができ、大変うれしく思っているわけでありまして。

天津では、四日市の1世紀にわたる産業都市の中でどのような環境上の苦い経験をしたか、あるいは都市政策の中で現在どのような悩みを持っているかということを縷々(るる)、プロジェクターを使って話してきたわけでございます。きょうはその中身と全く同じですと長くなりますが、掻い摘んで、皆様方ご存じだとは思いますが、四日市の環境政策に至る経過をお話してご挨拶にかえたいと思っております。

私どものまちは、四日に市があるということで四日市というまちの名前が付き、それも200年以上前からそういうまちであったわけでありまして、19世紀に入りまして、生糸や肥料が生産あるいは取引の場になりまして、非常に栄えたわけでございます。その後、繊維産業を経て機械工業産業、さらに戦後は石油化学産業、いわば日本で一番最初に石油化学のコンビナートができたのも四日市であるということでございます。

今では内陸部に電子産業や自動車産業もございますし、地場産業ということで、お帰りにぜひ買っていただければありがたいですが、万古焼という焼き物の産業もありますし、加えて山のほうには非常に広大な茶畑を持っています。三重県全体でも全国で第3位の生産量を誇るわけでございますが、三重県の中の主要な大産地が四日市のお茶でございます。

そういう意味では、産業のまちということは今でもそうですが、やはり今日においてどのようになってきたかということで皆さんも四日市の経過を十分頭に入れられて、そしてこのシンポジウムをさらに意義のあるものにしていただければ、私どものまちで開催されたことは大きくお役に立つのではないかと考えております。

四日市の場合には1950年代の後半に入りまして一気に石油化学コンビナートが出来上がりまして、住宅地とのバリアがうまくいかなかったということもありますが、非常にスピードの速い工場群のせいもあって、亜硫酸ガスの大気汚染が発生したり、あるいは臭い魚が発生したりしたわけです。

この問題で一躍公害訴訟という裁判に発展していくわけですが、1972年に公害判決が出まして、急速に公害対策が、事業者の努力 - お金をつぎ込む、行政の総量規制を中心としたマネジメントに精を出す、あるいは市民の方も公害の克服のために理解を示すという中で、四日市の公害が大変な事態を起こしたわけですが、その後、改良に改良を重ねて改善されてきているわけでありまして。

私はよく人に聞かれると申し上げるのですが、四日市は、実は過去の1回限りの忌まわしい大気汚染なりそういう産業公害が出て、それが今なくなったという形では違うわけでございます。四日市の場合には、石油化学産業は着々と操業を維持して、その維持する中で大気汚染なり、水質汚濁なりいろんな問題を食いとめて、さらに技術の改良に努力を重ねて克服していった。そして現在も、今は体質改善というか、方向転換というか、構造改革といいますが、そういう転換期に石油化学産業もありますが、しかしなお、産業としてはずっと活動を続けている。そこに四日市の公害とそれに対する闘いといいますが、あるいは公害をなくすための必死の努力が浮き彫りにされるのではないかと、過去にあった、もう今はない、そういう形では産業は根づかないという意味では、四日市は違いますよということをよくお話しさせていただきます。

公害判決の後、大気汚染についても総量規制が実施されて、一方では普段の絶え間ない努力を重ねていって、1987年には環境庁から「星空の町」という指定をされました。つまりそのぐらい空がよくなったということでございます。そして1990年になりますと、非常に長たらしい名前ですが、四日市に財団法人国際環境技術移転研究センター、略称してICETT(アイセツ)を三重県あるいは産業界のご支援を得てつくっていただきました。このICETTが10年間にわたって、発展途上国や環境を学ばなければならないという国々の行政関係者、あるいは技術担当者が四日市に見えまして、1カ月ないし2カ月、泊まり込みで研修をして国に帰られた。そして帰った国で環境対策に先進的に働く、こういうふうな、いわば人材育成、環境克服技術の指導と、我々はよく公害克服技術を輸出しているのだと申しておりますが、こういう機関を10年前につくりまして、もう既に多くの成果を上げており、これからもICETTの活動は、私どもにとっても三重県や産業界の応援を得る中でまちの誇りにしているということでございます。

ちなみに1995年には、四日市市は国際連合の環境計画からグローバル500賞を受賞いたしましたところでございます。このような形で来たわけですが、一方では、地球環境という観点から環境問題が新しい展開を見るようになりましたのは皆さんもご承知のとおりでございます。そこで四日市市におきましては、1995年、まさにグローバル500賞をいただいた年でございますが、四日市市環境基本条例を制定いたしました。そして環境施策を総合的かつ計画的に推進していくということで、四日市市環境計画というものをつくって、この環境計画に準拠して環境施策を実施していくという体制をつくり上げ、先ほどIBMの社長さんのお話にありましたが、快適環境都市宣言をいたしましたところであります。

今日におきましてはISO14001を2000年の冒頭に取得いたしました、四日市市もさらに環境マネジメントにおいてもあらゆるところでこれを広めていく、できることは最後には市民まで広めていきたいという計画で実施しております。

そして昨年度には、第2期の四日市環境計画、つまり第1期を終わりました、環境計画の策定も第2期に入りました。



こうして四日市の環境都市というのが、かつては苦い思い出の都市だったわけではありますが、今では環境に関しては最も敏感な都市という形でまちづくりをやっていこうと考えております。

計算されますと、公害判決が出てちょうど30年でございます。30年たつて資源循環型の社会の構築が大変強く叫ばれておりますが、こういうときに私どももさらに一層強い決意を持って快適環境都市宣言のように快適なまちにしたいと思っております。

今後いろいろご声援をよろしくお願い申し上げまして、きょうのこのシンポジウム開催の地元の市長としての歓迎のあいさつにかえさせていただきます。本日はご苦労さまでございました。ありがとうございました。(拍手)